

# 3 sheep

山田裕幸 作

ある地方都市の高校。小さな会議室。3月。  
学年末試験が終わり、進級会議が行われようとしている。  
部屋には、英語科の安藤がいる。

1

しばらくして、国語科の君島がやってくる。

君島 (部屋に入ってきて) あれ、神原先生、まだ？

安藤 はい。

君島 そう・・・じゃあ、まあ、少し待ちましょうか。全員、そろってた方がいいですしね。時間、大丈夫ですか。

安藤 ええ。私はもう、今日は何もありませんので。

君島 OKです。じゃあ、そうしましょう。

君島、座って、

君島 一年間、お疲れ様でした。どうでしたか本校の生徒たちは。

安藤 とっても素直でいい子たちだと思います。

君島 田舎の高校生ですからね、よく言えば純情、悪く言えば幼稚っていうかね。

安藤 ええ。

君島 でも、あまり無理しないでやるといいですよ。この仕事は、適度に手を抜くぐらいでちょうどいいと思っっているんですよ、僕は。ま、あんまり大きな声じゃ言えませんがね。

安藤 ええ、そうかもしれません。

君島 なかなか続きませんよ。24時間、全力投球じゃ。僕はね、生徒にも継続は大事だつてよく言うんですよ。何事もね、継続性の中に真理はあるってね。

安藤 (手帳などを取り出し) 継続性の中に真理はある、と。

君島 メモるの？

安藤 ええ。

君島 へー、いつもメモるんですか。

安藤 忘れちゃうんですよね。こうしてメモしないと。面白いよって言われた本とか、映画とか、もう、すぐこうしてメモるんです。

君島 ああ、それ、わかります。本屋で、次来たときに買おうと思った本って絶対買わないっていうか、忘れますよね。

安藤 ええ、ほんと。

君島 そっか。え？え？どんな映画、勧められるんですか。

安藤 えっとですね、私、映画、ほんと全然観たことないんで、「ET」、

君島 「ET」も？

安藤 ええ、もう、初歩の初歩から観ていないんですよ。

君島 あとは？

安藤 あとは「羊たちの沈黙」「シザーハンズ」「レインマン」「ゴースト」「マルサの女」「タクシードライバー」「仁義なき戦い」……

君島 何か、一貫性ないね。

安藤 先生、わかります？

君島 「タクシードライバー」以外は観たことあります。

安藤 えー、好きなんですか、映画。

君島 好きっていうか、まあ、好きですね。

安藤 え、お勧め、教えてくださいよ。

君島 そうだな。

安藤 一番、好きな、

君島 一番？難しいな。

安藤 あえて選ぶなら、

君島 あえて？そうだなあ、うーん、やっぱり「釣りバカ」かな。

安藤 ああ、

君島 あれ？知らない？「釣りバカ日誌」

安藤 いや、知ってますけど。(メモ帳をしまう)

君島 駄目？釣りバカ。

安藤 駄目じゃないですよ。

君島 難しいんだよね、作品、人に勧めるのって……

安藤 ええ。

君島 (しばらくたって) あ、そうそう、甥っ子がね、来年、大学受験なんですけどね、英語がからつきしダメなんですって。どうすればいいですかね。やっぱり単語力ですかね。

安藤 まあ、単語力は大切ですね。

君島 ひたすら覚えると。

安藤 やっぱりある程度は。もちろん、テストで長文の単語が全部わかる必要はありませんけど。

君島 僕なんかは、大学受験のとき、構文をかなり覚えたつもりだけど、もちろん、重要です。でも、一番いいのは、なるべく多くの英文に触れることでしょうね。なんか、ドキドキするような物語を英語で読んだりすると、自然に身に付くと思いますよ。

君島 なるほどねえ。どんなのがいいかな、

安藤 やっぱり、恋愛物とかがいいんじゃないですかね。

君島 恋愛ね。

安藤 ええ、なんか、いいかなって。

君島 いやあ、ありがとうございます。今度、妹に電話しておきますよ。英語は恋愛だ、って。

安藤 あ、いや。

君島 しかし、先生。発音、アメリカ人みたいですね。

安藤 え？

君島 先月だったかなあ、授業に向かおうと階段上っていたら、実に綺麗な英語が聞こえてきたんで、誰が授業しているのかなって覗いたら、先生でした。ほんと、本物のアメリカ人みたいで驚きましたよ。やっぱり、留学とかされたわけですか。駅前とかじゃなくって。

安藤 大学生のときに、1年間。

君島 やっぱり！え？何洲ですか。

安藤 いえ、アメリカじゃなくて、イギリスだったんですけど。ロンドン。どうりでね・・・なんか、普通とは違う感じだった。

安藤 いえいえ。

君島 うちの娘もね、ま、二人いるんですが、学校でね、やっていますよ、英語。歌うったり、まあ、そんなレベルですけども。

安藤 小学生ですか？娘さん。

君島 ええ、小学3年と、5年ですね。

安藤 そうなんですネ。

君島 結婚が遅かったもので、年齢の割に、子供がまだ小さいんですよ。先生は、その、なんでこっちに？

安藤 あ、その、まあ、夫の都合で・・・

君島 あ、あ、ごめんなさいね、いや、そういうつもりじゃなかったんですけども。

安藤 いえ、そんな、別にいいんです。

君島 遅いな、神原先生、ね。

しばし、間。

君島 あ、この前、演劇部の公演、見ましたよ。市民会館で。

安藤 え？本当ですか？「大蛇と与平」

君島 ええ「大蛇と与平」たまたま、家族で前を通ったんですよ。そしたら、ちやうど看板が目に入って。時計を見たら、ちやうどうちの学校が出るところでしてね。子供たちが見たっていうから、急いで車を停めて。ロビーに入ると、先生、どうしたんですか、先生、どうしたんですかって、うちの子がびっくりしてましたよ。パパ、本当に先生なんだねって。

安藤 ありがとうございます。

君島 なかなか、あれですね。意外な生徒ががんばっていたんで、驚きましたよ。今野なんて、普段、ほんとに目立たない生徒じゃないですか。それなのに、あんなひょうきんな演技をするなんてね。

安藤 生徒って、教室にいるときの顔と、がらつと顔、変えますよね。ほんと、びっくりです。

君島 台本だって、あれでしょ？三上が書いたんでしょ、あれ。

安藤 ええ。なんか、地元の民話を題材にしたものがやりたいって言ってきたので、いろいろ二人で図書室で調べたりしたんですよ。

君島 国語の成績はひどいもんだけど。いや、去年、持ってたんですよ、現代文の授業。漢字だって、ろくに読めもしないんですよ。

安藤 やっぱり、若いって可能性がありますよね。

君島 先生だって、まだまだ、若いじゃないですか。

安藤 いえ、もう、30超えていますから。

君島 あ、そうですか。

安藤 そうですよ、もう、オーバーです、オーバー。

君島 へー、意外だなあ、そうでしたか。

神原がやってくる。野球部の白い帽子をかぶってる。

神原 すいません、お待たせして。

君島 お、神原先生。

神原 いやあ、参りましたよ。

君島 でした。

神原 来たんです。また。

君島 また？参っちゃうねえ。

神原 ほんとですよ、ほんと、どうしたらいいんですかね。

君島 そうだねえ。

安藤 どうかしたんですか。

神原 いやね、最近、近所に引越してきたおじさんがいるんだけどね、金属バットの音がうるさいっていうんですよ。カーンって音。

安藤 ああ。

神原 確かにね、気になる人には気になるかもしれないけど、長年、活動はしてきたわけだし、そのおじさんだって、ここに高校があるって知っていて引越してきたわけでしょ？それなのに、うるさいって言って、クレームしてくるわけ。

君島 だけど、この前、説明しに行ったんでしょ？教頭が。

神原 そうなんですけどね、なんか、夜勤やっている人で、昼間眠らなくちゃいけないのに眠れないって。このままだと、身体がおかしくなるって。

君島 それで、どうしろって言うの。

神原 他の場所でやれって、練習。

君島 他の場所って言うっても、どこ。

神原 いや、河川敷とかありますけどね、10キロ以上ありますしね、現実的じゃないかなって。

君島 だよねえ。

神原 今日なんか、引越すから、引越しの費用を出せって。

君島 は？なんだよ、それ。

神原 ほんとですよ。

安藤 出すんですかね、学校。

神原 どうだろう。でも、このまま放置しておいて、解決するって感じでもないんだよね。

安藤 そうですよね。

君島 出すんじゃない？野球部は、我が校の宣伝部長みたいなものだから。学校だって、放ってはおかないだろう。今年こそはね、甲子園、お願いますよ。

神原 生徒も、やる気だしますし。結構、いいと思いますよ、新チーム。

君島 いいピッチャーがいるんだよね。

神原 西ですか。

君島 西飛雄馬くんね。

神原 最近は150キロ、平気で出しますからね。  
君島 ひゃー、すごいね。(安藤に) 興味ない？

安藤 野球はあまり。

君島 西飛雄馬なんて、すごい名前だろ。

安藤 ええ。

君島 あれ、星飛雄馬知らない？

安藤 さあ。

君島 そ。

神原 すいません、そんなんで遅れてしまって。

君島 いやいや、仕方がないさ。で、教頭には言ったの。

神原 ええ。でも何か生徒が盗撮にあったとかで、今、駆行きましたけど。

君島 盗撮？

神原 なんか、あつたみたいですよ。

君島 だいたい、短すぎるんだよな、スカートが。階段とか上ってたら、や

つぱり気になるもんなあ。

神原 ええ。

君島 あれは、下に何か履いているの。

安藤 え？私ですか？

君島 生徒は、履いているの。パンツじゃなくて、パンツの上に、

安藤 さあ、どうでしょうね。履いている子も、履いてない子もいるんじゃない

いでしょか。

君島 そう。

安藤 ええ。

君島 なんかもっと、自己防衛しないとならないよね。変なやつ、多いから。

先生も、積極的に言ってるね。あまりに短いスカート履いてる生徒いたらさ、少しいいから。われわれが言うと、すぐセクハラだって、会話にならないから。

神原 今って、何でもハラメントになりますもんね。

君島 ほんとだよ。まったくだよ。

しばし間。

君島 さて・・・では始めましょうかね。

神原 そうですね。

君島 じゃあ、まず、最初の生徒から、担当の、神原先生、お願いします。

神原 はい。えー、私の担当はですね、2年C組の石井宏という生徒です。

資料にもあるように、学年の成績で、1が5つ付きました。数学Ⅱ、世界史、英語ライティング、家庭科、現代文の5つです。

君島 バランスいいね。

神原 ええ、いいバランスです。あと出席日数が足りていないのが、1単位の数学基礎というところで、こちらは一応1が付くことになります。全体的に遅刻も多く欠席も年間で45日ということですよ。

君島 追試は実施したのかな。

神原 はい。数学と英語に関しては追試も実施したようですけど、そちらにも欠席ということですよ。家庭科も課題を提出するように再三迫ったようですが、それも未提出だと。ちなみにエプロンだそうです。オリジナルの。それを型紙から作るという課題だったみたいです。家庭科。なるほど。エプロンかあ。エプロンは定番だもんな。

神原 続いて担任による所見です。石井くんは、1学期の遠足までは新しいクラスにもなじんでいたが、遠足の後から次第に欠席が目立つようになった。2学期に入ると、さらに遅刻、欠席が目立つようになり、成績も下降。登校しても、授業中はほとんど寝ていることも多い、とのことですよ。

君島 そうか。せっかく登校しても寝てしまっているんじゃない、ダメだな。

神原 なお、担任、あ、田島先生ですけども、社会科の、何度か家にも電話をしたそうですがなかなか繋がらず、2学期の終わりにやっと保護者と繋がり状況を話したところ、保護者は「本人に厳しく言っておく」と言ったとのことですよ。

君島 何だ、それじゃダメだろ。保護者、呼び出すとかしなくっちゃ。

神原 そうですね。確かに。

君島 ちよっと田島先生は甘いんだよ。もう少し厳しくしないと、結局、こういう結果になってしまうんだ。いかがですか、安藤先生。

安藤 え？

君島 え？じゃなくてですね、ご意見。

安藤 あの、何か、遠足であったんでしょうか。

君島 どういうことですか。

安藤 先ほど、神原先生の報告の中に、遠足の後から変わったとありましたよね。

神原 ええ。

安藤 何か遠足であったんでしょうか。

神原 さあ、どうでしょうね。

安藤 きつと何かあったんですよ。

君島 それはあれですか、おやつを忘れたとか。  
神原 ああ、おやつですか。

安藤 いや、おやつじゃなくて、なんかトラブルがあったとか。  
君島 どうですか、神原先生。

神原 さあ、それはわかりません。  
安藤 ちよつと、気になりますね。だって、遠足の後からですものね、変化があったの。

君島 まあでも、遠足で何があったかはわからないけど、結果として、単位の取得がなされていないわけだから。  
安藤 ですけど、遠足で何があったのかを、石井くんに聞いてみたらどうでしょうか。

君島 おやつを忘れただけかもしれないじゃないか。  
神原 そうですね、たぶん、そんなことだと思います。

安藤 きつと、バスの中で何かあったんですよ。気分が悪くなって、エチケツト袋を探したけど見当たらなかったとか、カラオケを強要されたとか。

君島 しかし、さっきも言ったように、遠足で何かあったとしても、単位が取得されていない以上は、我々としては進級不可という結論を出すのが妥当だろうということです。ね、神原先生。

神原 そうですね。確かに遠足でエチケツト袋がなかったのは大変でしたが。  
安藤 いや、エチケツト袋はたとえ話で、実際にそうだったわけじゃありません。

君島 いやいや、よしんば、エチケツト袋があったとしてもだよ、ここは石井くんには、もう一回、二年生をやってもらおうしかないだろう。  
神原 賛成です。

君島 ね、安藤先生。  
安藤 まあ、確かに追試も受けないというのは問題ですね。

君島 だろ。しかもエプロンも未提出だ。  
安藤 ええ。  
神原 やつぱり早めに保護者に会って、きちんと支援なり指導なりをお願いしておくべきでしたね。

君島 そうだよ。なかったのはエチケツト袋じゃあなくて、親の愛と我々教員の気配りじゃなかったんだろうか。

安藤 だから、あくまで例え話でして、  
君島 じゃあ、田島先生には僕から言っておくし、石井くんは留年ということとで決めたいと思います。まあ、保護者が何か言ってきたとしても、



この成績じゃあ、文句も言えないだろ。いいですね。

神原 はい、結構です。

安藤 わかりました。

君島 よし、これでまず一人終わりだ。疲れるね、この会議は。

神原 そうですね。

君島 しかしまあ、決りだからな、仕方ない。すべては僕が決めたんじゃないんだし。組織が決めたことだからね。あまり感情を込めないのが正解だ。

神原 ええ、まったくです。

君島 与えられた仕事を一生懸命やるのが、教員の正しい姿だ。

沈黙。

君島 神原先生は、好きな映画、なに。

神原 映画ですか。

君島 そうそう。

神原 あんまり、観ないですから。

君島 でもあるでしょ、好きなの。

神原 そうですね。「釣りバカ」とかですか。

君島 お、神原先生も、

神原 いや、ほんと、詳しくないんで。「ナウシカ」とか。

君島 ナウシカは観た？

そこに、電話がかかってくる。

安藤 ええ、ナウシカは。

君島 そうだよねえ。

神原 ちよっとすいません。(電話に出て) はい、神原です。はい、ええ、そうですねですよ。ええ……そうですね、本人が直接来て……その件は、鮫島先生に確認して……あ、そうですね、助かりますそれは……ええ……今ですか？会議です……ええ……教務の……年度末の……そうですね……進級会議……はい……いえ、そんなに時間はかからないと思うんですが……ええ……わかりました……教頭先生が帰ってき次第……はい……(電話を切る)

君島 例の件？

神原 ええ。教頭が、一緒に行こうって……その、おじさんの自宅まで。

君島 そう。

神原 気が重いな・・・

君島 大丈夫かな。教頭が行って、余計にこじれたりしないかな。

神原 駅前の店でケーキ買ったから、任せろって。

君島 ケーキ？相手は引越し代金要求してんのに。で、盗撮はどうなったって？

神原 ああ、どうですかね。

君島 そう。

神原 こんなことやるために教員なったわけじゃないんですけどね。

君島 与えられた仕事を一所懸命やれば、いずれ、どこかで報われるよ。きつと。

神原 だといいですけど。

安藤 (急いでメモ帳を取り出してメモる)

君島 だから大丈夫だよ。

神原 ねばっこい、おじさんなんですよ。

君島 納豆みたいにか！

神原 ま、まあ。

君島 納豆はねばっこいよね。僕なんか、100回くらいかき混ぜるから、かなりねばっこくなる。家内はそんなにかき混ぜなくてもいいじゃないのとか言うんだけど、僕は無理なんだよね、100回以上かき混ぜるくらいじゃないと。

安藤 費用、どうするんですかね。

君島 だから、あれだろ。ケーキでなんとかしようってことだろ。

安藤 やっぱりお金で解決するっていうのも、なんだかな、って思いますけど。

君島 いいんじゃない。それで解決するなら一番いいと思うけど。

安藤 まあ。

君島 教頭がどうするかだな。

神原 死なねえかな。事故とかで突然。

しばし間。

神原 いや、あくまで例え話。

君島 まあね、気持ちはわかるよ、気持ちは。

安藤 やっぱりお金が一番ですかね。

君島 そうだね、お金だよ、お金、やっぱり。金、金、金・・・

安藤　　そうですね。やっぱりお金、大切でもんね。

君島　　だから野球部には頑張ってもらわないと。西飛雄馬くんに。

安藤　　どうつながるんですか。

君島　　だから学園存続のために、野球部が果たす使命っていうの？大きいでしよ。いきなり進学率あげろって言われてもさ、困るんだよ。授業時間増やしたって、勉強しないんだから、生徒が。ねえ。そうでしよ。

安藤　　確かに、時間と学力は単純に比例しませんからね。

君島　　そうなんだよ。上の連中は、しよせん机上の理屈っていうかさ。生徒座らせて、補習すれば、大学入れると思ってるんだもんな。

神原　　あの、次、行きませんか。

君島　　ああ、そうだね。いろいろあるんだもんな、神原先生は。

神原　　すみません。

君島　　いいのいいの、ただでさえ学年末はいろいろあるし、手短に終わらせましょう。

神原　　よろしくです。

君島　　それじゃ、次は、安藤先生の担当かな。

安藤　　はい、私が。

君島　　よろしくお願いします。

安藤　　私が報告する生徒は、2年A組の木崎翔太くんです。

神原　　木崎か。

君島　　木崎ね。

安藤　　お二人ともご存じですか。

君島　　直接教えてはないけどさ、ああいう生徒だからね、なんとなくは。

安藤　　先生も？

神原　　俺は1年のとき、持ってたから。

安藤　　そうでしたか。木崎くん、何度も頭髪指導を受けたんですが、いっこうに髪を切ることをしなかったんですね。なんでかわかります？

神原　　知らないよ。お化けみたいにダラーっと伸ばしててな。顔なんて見えないもん。時々、跳び箱とかで髪が揺れて、ちらっと見えるんですよ、顔が。もうほとんど貞子ですよ、貞子。

君島　　男子は耳にかからないように、ですからね。

安藤　　彼はなぜカタクナニ髪を切らなかったのかということですね、彼はその、文学に憧れていたということですよ。

神原　　文学？

安藤　　はい。

神原　　文学と髪が何の関係があるんだよ。

君島 あのね、神原先生。昔から文学青年は、髪を伸ばすって決ってるですよ。

神原 決ってるんですか。

君島 そうだよ。

神原 そうだったんですか。

安藤 それで彼は、長い髪のままだったと。ちなみに、好きな作家は、

君島 太宰だろ？

安藤 正解です。

神原 よくわかりますね。

君島 典型だな。

安藤 愛読書は、太宰治。特に小説「葉」の冒頭が好きだということ、私、調べてきました。読みますね。「死のうと思っていた。ことしの正月、よそから着物を一反もらった。お年玉としてである。着物の布地は麻であった。鼠色のこまかい縞目が織り込められていた。これは夏に着る着物であろう。夏まで生きていようと思った。」

君島 太宰の最初の作品集に収められているひとつです。その名も「晩年」

神原 どこまでも暗いな。

安藤 さすが、国語科。

君島 これでも、一応、私も文学青年だったからね。一通り、太宰は読むものです。まあ、通過儀礼のようなものかな。

神原 それで、木崎、

安藤 あ、それです、ね、木崎くん、ずっと髪を切らなかつたんですけど、北村先生も粘り強く指導したみたいで、2学期になって、いきなり髪を切って登校したんですよ。

君島 ほう。

安藤 髪を切ったのはいいんですけど、その、ちょっと切りすぎたみたいなんですよね。本人は、床屋さんに毛先を5ミリほど切ってくれて言ったらいいんですが、何を勘違いしたのか、長い髪をバサッと、5ミリの坊主頭に仕立てあげられたそうです。

神原 普通気付くだろう。切っている間に。

安藤 それで、床屋でも太宰を読みふけていて、気付かなかつたと。

君島 筋金入りだね。

安藤 ええ。

神原 今年は残暑が厳しかったから。襟足だけでも短くしたかつたんだろうが、それが、仇と出たか。

安藤 しかも、頼んでもいないのに、床屋さん、前髪だけ少し長めにカット

神原　　したようで、  
スポーツ刈りな。  
安藤　　そう言うんですか？  
神原　　そう言うんだよ。古い髪形だ。きっと、地元で古くからある床屋にい  
行ったんだろな。  
安藤　　翌日登校したところ、クラスの一人が木崎くんのこと、「棟梁」って呼  
んだんですって。  
神原　　棟梁かあ。  
安藤　　つらいですよね。他にも「親方」とか、「ダフ屋」とか呼ぶ生徒もいた  
とか。どうも、高校生にしては老け顔だったみたいですね。  
神原　　あいつ、老け顔だったんだ。  
安藤　　それでまあ、それ以降、ぱたっと不登校に。  
神原　　うーん。ある意味、分かりやすいな。  
安藤　　なので、2学期以降、テストも授業も一切、受けていません。  
神原　　北ムーは？  
安藤　　北ムー？  
神原　　あ、北村先生。  
安藤　　北ムーって呼んでるんですか？  
神原　　悪い？  
安藤　　あ、いいんですけど。北村先生、ずいぶん悩んでいらつしやって。  
神原　　何だ、全然、知らなかったよ。話してくれたらよかったのに。  
安藤　　何度もお宅に伺ったり、棟梁って呼んだ生徒も謝罪をしたり、いろい  
ろやってみたそうなんですが。  
神原　　そっか。大変だな。  
安藤　　北村先生も、頭髮の件で、かなり厳しく指導したみたいで。先生ご本  
人もかなりダメージを受けているそうです。  
神原　　学年会とかで共有すればいいのにな。  
安藤　　まあ。  
神原　　ねえ、君島先生。  
君島　　え？ああ、うん。  
安藤　　どうしたんですか、先生。  
君島　　いやね、さっきからずっと考えていたんだけどね、  
安藤　　はい。  
君島　　木崎くん、どうして三島由紀夫に向かわなかったのかなって。体鍛え  
て、鉢巻巻いて、登校しなかったのかって。  
安藤　　三島由紀夫ですか。

君島 言っていること、わかるかな。

安藤 いえ、

君島 神原先生は？

神原 三島由紀夫は知ってますけど。

君島 ……よし、僕が木崎さんと会ってみよう。それで、三島文学について、一緒に語ってみようと思う。きっと、木崎くん、また学校に来ると思うよ。

安藤 そんなに、三島由紀夫はすごいんですか。

君島 せっかくのスポーツ刈りだ。それを生かささない手はないだろう。

安藤 しかし、さすがに毛も伸びたでしょう。

君島 それでもさ、一応。僕たちは教師だから。仕事だよ。

安藤 そうですか。

神原 それで、どうするんですか？出席日数、全然、足りてないんですよ。はい。

安藤 事情はなんであれ、木崎も、進級させるわけにはいかないんじゃないでしょうか。

君島 保護者は何て言ってるの。

安藤 ああ、それが、木崎くんって、養子なんですって。

君島 養子？

安藤 はい。なんか、小学校の時、事故でご両親を亡くしたみたいで、施設で育つたみたいなんですけど、その関係の、なんかの宗教法人の信者さんが、木崎さんと養子縁組をしたそうなんです。

神原 なんか壮絶な人生だな、木崎。

君島 そうか。

神原 だけど石井も、単位の取得がされていない以上、進級させないってことですよ。木崎だって、同じでしょ。養子だから進級させるとかないですよ。

君島 しかしだな、

神原 しかし、なんですか、

君島 さっきから言っているけど、三島を目指せばいいと思うんだ。

神原 三島はいいんですよ。いま、この場は進級会議ですから。

君島 そうなんだけどね、どうにかして救えないかな。

安藤 木崎くんをどのようにしてまた学校に向かわせるかは、また別の機会に話すべきだと。

神原 そうそう。そういうことですよ、言いたいのは。ね、君島先生。

君島 そうかあ。

神原 ですからね、一応やはり、木崎も、進級は不可ということで、いいんじゃないですか？どうですか。

安藤 石井くんと整合性もありますしね。どうですか、君島先生。

君島 そうだね。確かに、このまま進級していい要素は残念ながらないね。気持ちには痛いほどわかるんだけど。いや、僕もね、学生の頃、一度、いじめにあつてね。

安藤 そうなんですか。

君島 ああ、そうさ。それで、当時の先生にいろいろ助けてもらったりして、それが教師を目指した動機っていうのかな、生徒に寄り添える教師になりたいって思ってたんだよ。

安藤 人に歴史ありますね。

君島 安藤先生だって、あるでしょ、そういう、動機。

安藤 ああ、まあ、

君島 神原先生も。

神原 まあ。そりゃね。

君島 ね。みんな、金のために教員やってるわけじゃないんだよ。やっぱり、生徒のために、教員やっているんだよ。違う？

神原 いつになく熱いですね。

君島 いやね、最近、学校やめようと思ったことがあつてさ。でも現実には、家のローンも、車のローンも、子供の養育費もあるわけだ。やめられないでしょ。やめたら、ローン、誰が払うのよ。そりゃね、正直、学校の方針がおかしいとか、上の言うこと、違うな、とか思うことはあるよ。だけどやめられないでしょ。わかるかな、安藤先生。

安藤 ああ、ええ、

君島 何でこんな話してるんだろ。

神原 いいんですよ。先生も、どこかで話さないと。ため込むのはよくありませんからね。

君島 そうだね。

神原 飲み、行きましようよ。

君島 お、いいね。

神原 そういえば、安藤先生の歓迎会もまだでしょ。

君島 ああ、結局、やってないね。もう今年度も終わるのに。

神原 どうですか、行きませんか、安藤先生。今夜でも。

安藤 今夜ですか。

神原 予定ありますか？

安藤 ちよつと、相談してみますね。主人と。

神原　　お願いします。

君島　　主人とか、言うんだ。

安藤　　あ、今、初めて使いました。

神原　　駄目ですか、主人じゃ。

君島　　だって、ご主人さまだろ、今時、おかしくないか。

神原　　先生の奥さんは、呼ばないんですか。先生のこと。

君島　　いや、呼ぶけどさ。

神原　　いいじゃないですか。普通ですよ。ちょっと敏感になりすぎてますって、今。

君島　　ちなみに奥さんも、家の奥の方にいるから奥さんなんだよ。知ってた？

神原　　そうなんですか？へー。

君島　　そうなんだよ。

安藤　　あとで、聞いてみます。

君島　　あ、うん。

神原　　じゃあ、木崎も、いいかな。留年っていうことで。

安藤　　いいと思います。

君島　　じゃあ、そうしよう。木崎くん、留年・・・と。

神原　　ふう。

君島　　疲れるね。

神原　　地方予選の決勝並みですよ。

君島　　それはちょっと盛り過ぎでしょ。

神原　　まあ。(安藤に) ご主人はさ、どんな仕事してるの。

安藤　　ああ。

神原　　教師？

安藤　　いや、

神原　　そう。

安藤　　普通の、

神原　　普通？

安藤　　ええ、普通の。

神原　　そう。

安藤　　お母さんが、倒れて。主人の。

神原　　そうなんだ。

安藤　　最初は、私は東京に残って、別居も考えていたんですけど、この学校で英語科の教員を募集していて、それで採用していただくことになって、それでまあ、一緒にこっちに。

神原　　同居。



安藤 はい。

神原 ご主人さんが、それで、介護とかしてるんだ。

安藤 まあ、そんな感じですね。

神原 ふーん。大変ですね。

安藤 いえ。

神原 ……北ムー、大丈夫かな。あんまり、考えすぎないといいな。

君島 あ、もしかして、北村先生と、同期？

神原 ええ、そうなんですよ。

君島 そっか。

神原 北ムー、結婚したがってるんですよね。

君島 神原先生は駄目なの。

神原 俺ですか？そりやないですよ。なんか、そういう感じじゃないですもん。

君島 そう？結構、お似合いだと思うけど。

神原 ちよつとないなあ。でも。

神原の携帯が震える。

神原 あ、教頭だ。(電話に出て) はい。あ、もう戻られましたか。いえ、まだ。はい。わかりました。いえ、

安藤、電話を代わってくれ、みたいなジエスチャー。

安藤 教頭先生ですか。

神原 そうだよ、

安藤 ちよつといいですか。

神原 ん？

安藤、神原から電話を取る。

そして安藤、教頭と何やら話す出す。

君島 もう帰ってきたって？

神原 ええ。今。

君島 なんだよ、やる気、まんまんだな、教頭。

神原 本当ですね。

君島 うまく、おさまるといいけどな。

神原 ええ。あ、誰かい人、いませんか、北ムーの相手。結構、親戚筋からプレッシャーあるみたいなんですよね。

君島 そう。なんか、いそうだけだね。顔だって、まあ、悪くないし。

神原 性格が悪いんですよ。教師。実家暮らし。貯金そこそこあり。36歳女性。これで誰か。

君島 ぎりぎりだな。

神原 ぎりぎりなんですよ、ほんと。

安藤、神原に携帯を渡す。

安藤 すみません。

神原 (電話に出て)ということで、はい、あと少し、待ってもらえますか。ケーキですか？さあ、少しくらい大丈夫じゃないですか。保冷剤は……じゃあ全然、大丈夫ですよ、わかりました。じゃあ。

神原、電話を切る。

神原 なんか、ケーキ、痛まないかなって……そんな心配、しなくていいのに。もつと他にあるのにね、教頭だったら、心配すること。

君島 痛まないだろ。夏じゃないんだし。

神原 (安藤に)何か用事あったんですか？

安藤 すみません。なんか、今だ！って思ったもので。

神原 言いにくいこと？

安藤 そうじゃないんですけど。

神原 ふーん。

安藤 すみませんでした。

神原 いや、いいんだけども。

君島 じゃ、最後、いきましようかね。

神原 そうですね。

君島 っていうても、まあ、吉田くんなんですけども。

神原 ああ。吉田。

君島 安藤先生、大変だったね。

安藤 こちらこそ、ご迷惑をおかけしました。

君島 吉田健吾くん。元、1年E組。冬休みに、八幡神社の境内で首つり。

神原 1、2学期の成績は、問題なし。担任所見……所見か。所見も何も、亡くなったわけだし。

君島　まあでも、公式文書としてさ、  
神原　なんか、お役所みたいですね。  
君島　まあ。  
神原　この場合も、安藤先生、減給になるんですか、やっぱり。  
君島　さあ。なんか、聞いている？  
安藤　え？減給になるんですか？私。  
君島　自殺は、減給にはならないだろう。  
安藤　え？自殺じゃなければ、減給なんですか。  
君島　担任するクラスの生徒が留年で10%、不登校で5%。  
安藤　何ですか、それ。全然、知りませんでした。  
君島　採用のときに聞かなかった？  
安藤　はい。  
神原　相変わらず駄目だな、教頭。  
君島　しかし、生徒の自殺は想定されていないから。  
安藤　なんか意味わからないですけど。そのシステム。  
君島　それで所見、なんだけでも。  
神原　必要ないでしょ。所見は。  
君島　じゃあ、空欄でいいのかな。  
神原　だって故人でしょう。所見書いて、いったい誰が読むんですか。  
君島　読むんじゃない？校長とか。  
神原　読みますかね。  
君島　知らないけど、欄があるんだからさ。どう？所見なんだけど。  
安藤　私、書きますよ。所見。  
君島　じゃ、いいかな、お願いして。  
安藤　わかりました。  
君島　一応、欄があるからさ。後で文句言われるよりいいだろう。  
安藤　わかりました。書きます。  
神原　で、なんで自殺したの。  
安藤　警察にも聞かれましたけど。  
神原　いじめ？  
安藤　何人かの信頼できそうな生徒に聞いたんですけど、いじめみたいなことはなかったって。  
君島　まさか、うちの学校でねえ。  
神原　生徒が嘘をついているかもしれないじゃないか。  
君島　生徒を信用するのが一番だろう。  
神原　まさか死ぬとは思わなかったとか、思ったんじゃないですか。

君島 しかし、学校もうまくやったよな。どうやったんだろ。  
神原 知りません？理事長、裏で、うまくやったみたいですよ。なんでも、  
警察に知り合いがいるとかで。  
君島 え、そうなの。何で知ってるの。  
神原 そう聞きました。  
君島 ふーん。さすが野球部の顧問は違うな。情報が。  
神原 ま、でも、よかったね。いじめとかあったら、大変だったよ。騒がれ  
て。  
安藤 保護者も、あんまりオオゴトにしたくないからって、必要以上に、問  
題にしませんでしたから、吉田くんは、遠くに引っ越しをしたとい  
うことになっています。  
神原 どこに。  
安藤 はい。  
神原 どこに引っ越したの。  
安藤 いえ、それは特に。  
神原 おかしいよね。普通、引っ越したら手紙を書くとか、ほら、あるでし  
よ。新しい住所知らないよ、手紙、書けないでしょ。  
安藤 確かに、そうですね。  
神原 あったんだよ、いじめが。だから。みんなにいじめられてたんだよ。  
安藤 いやでも、生徒は、  
神原 駄目だよ、生徒の言うこと、信じたら。  
安藤 はあ。  
神原 生徒を信じるなんて、そんなこと、やめた方がいい。  
君島 ま、そういうときもあるな。  
神原 駄目ですよ。信じちゃ。  
君島 ・  
神原 ・  
神原 今、そうですね。人を信用しないっていうのが基準ですよ、世の中。  
昔と違うんです。  
君島 僕はまあ、そこそこ信じているけどね。  
神原 すごいですね。  
安藤 そうですか、減給ですか。  
君島 一時期、留年や不登校が増えてね。仕方なくというか、責任を明確化  
すると思うか、それで、始まったんだよね。  
安藤 おかしいと思わなかったんですか、他の先生方。  
君島 劇的に件数が減ったのは、間違いないからね。それ以降。  
安藤 減給になるから、出さない、と。

君島　まあそうだね。  
安藤　そうですか。  
神原　というか、追試、追試、それでも駄目なら、レポート、課題、どんなにアホでも単位を出すようになったわけ。  
安藤　全然、生徒のためじゃないじゃないですか。  
神原　当たり前だよ。誰も生徒のことなんて考えてないよ、上の連中は。  
安藤　じゃあ、何考えてるんですか。  
神原　そりゃ、つぶれないことだろ。学校が。  
安藤　なんか、わびしいですね、それ。  
神原　そういうもんだろ。綺麗ごとばかりじゃ、駄目だし。  
安藤　もっと普通でいいんだけどなあ、普通で。  
君島　あ！  
神原　なんですか？  
君島　太宰・・・入水してる。  
神原　入水？  
君島　ああ、自殺だよ。  
神原　三島は。  
君島　市ヶ谷で、自衛隊員に演説、そののち、切腹。  
安藤　大丈夫ですかね木崎くん。心配ですね。  
君島　いますぐ、会いに行くべきじゃないだろうか。  
神原　心配しすぎですって。  
君島　いいじゃないか。吉田君の件もあるし。心配し過ぎでも、あとでゲラゲラ笑うことができれば、それでいいじゃないか。  
安藤　（メモ帳を取り出し）  
君島　あとでゲラゲラ笑う、ね。  
安藤　（メモリながら）あとでゲラゲラ・・・  
君島　起きてしまったからでは遅いんだから。  
安藤　（それもメモる）起きて、しまったからでは、遅い・・・遅かったんですね、吉田くん。  
君島　どうかね。  
神原　えっと、じゃあ、もういいですか。  
君島　ああ、うん、そうだね。  
神原　行かなくちゃ、ならないんで、おじさんのとこ。  
君島　うまくいくといいけどね。  
神原　ほんとですよ。あ、どうしますか、飲み。  
安藤　ちよっと聞いてみますんで。

神原 そう。

君島 メールしとくよ。

神原 お願いします。じゃ、お疲れ様でした。

君島 ああ、お疲れ様。

神原、いなくなる。

安藤 所見、何、書けばいいですかね。

君島 まあ、人柄とか。

安藤 つまりお葬式ってことですね。

君島 葬式？

安藤 個人を偲んで、みんなしゃべるじゃないですか、お葬式で。ああいう人だった、こういうことがあった・・・って。

君島 ああ。

安藤 吉田くん、私のこと、好きだって言ってくれて。

君島 直接？

安藤 いえ、LINEで。

君島 それは、その、恋愛の対象として？

安藤 わかりませんけど。

君島 それで、安藤先生は、

安藤 もちろん、断りましたよ。

君島 どうやって？

安藤 どうやってって、それはできないって。

君島 それもLINEで？

安藤 はい、それもLINEで。

君島 いつ。

安藤 2学期の終わりです。

君島 誰かに話した？

安藤 いえ。

君島 そうか。吉田くんは、安藤先生のことが好きだったのか。

安藤 私のせいですか？

君島 高校生の思い込みは激しいからな。

安藤 だから、黙っていました。このことは。

君島 そうか・・・うん、今後もそれでいいと思う。

安藤 やっぱり、駄目ですか。こんなことで、人は死にますかね。私は罪人ですか。

君島 (黙っている)

安藤 所見、書きますね・・・

君島 うん、よろしくお願いします。

安藤 いえ。

君島 あ、申し訳ないけど、ご主人さんに聞けるかな。今夜の件なんだけど。

安藤 ああ、そうですね。

君島 悪いけど。

安藤 (LINEする)

君島 飲んで、騒いで忘れちゃおうよ。ストレスがね、一番、よくないよ。

ためるのが。

安藤 ええ。

君島 ストレスはダメだよ。

しばらく、沈黙。

安藤 遺書とか、出てこないですかね。私の名前、出てきたら、私のせいになりませんかね。

君島 ああ。

安藤 きつといじめがあつたんですね。だって誰も手紙、書こうとしないんですよ。引越したって設定なのに。クラスの子。

君島 ・・・

安藤 私が手紙を書きますよ。吉田くんの代わりに。みなさん、元気ですか、僕は元気になっています。みなさんのことが懐かしいです。もしよければ返事をください、待ってます、って書くんです。それで引越しの住所を封筒の隅にさりげなく書いておくんです。そうすれば、さすがに生徒たちも返事を書くでしょう。それで、私とその返事を書くんです。そうすれば、いじめもなくなりますよね。

君島 しかし、筆跡でわかっちゃうだろ。本人じゃないって。

安藤 パソコンで打てばいいじゃないですか。

君島 流行りにもついていかなくちゃならないぞ。男子高校生だ。ときに、下ネタも発信しなくちゃいけない。

安藤 がんばります。

君島 本当にできますか、そんなこと。

安藤 書きますよ。私が。吉田くんに代わって手紙を書きます。そうすれば、いじめも、なかったことになるから。  
君島 死者からの手紙か。

安藤　いいえ。まだ吉田くんは死んでませんから。どこかに引越しただけです。だから、だから、私はこうして所見を書くんですよ。そうすれば、また、吉田くんは動き出します。きっと。

神原、戻ってくる。

神原　あ、まだいた。(着替えている)

君島　お、着替えたな。

神原　着替えますよ。

君島　今、安藤先生、聞いてくれてるから。今日の飲み会、

神原　あ、教頭が、後で来れたら来てくれって、

安藤　わかりました。

神原　何？どしたの。

安藤　妊娠したんですよ、私。

君島、神原、沈黙。

神原　へー。

君島　それで、

安藤　ちよつと、来年度からお休みしたいなって、

神原　来年度って、もう来月だよね。

君島　いや、安藤先生、新しいクラス担任だって決まってるし、時間割だって、もう、決ってるよね。

安藤　ですよね。

君島　だったら、できるだけ、早い方がいいと思うな。

神原　今、教頭と、出るところだけ。

安藤　いいです、また後で。

神原　そうですか。

安藤　すみません。

神原　まあ、いいですけど。

君島　じゃあ、まあ、気を付けて。

神原　はい。

君島　行ってらっしゃい。

神原　行ってきます。

神原、いなくなる。



君島 よかったね。妊娠。  
安藤 ありがとうございます。なかなかできなかったの。  
君島 よかった。  
安藤 なんか、いきなり休職とか、ほんと申し訳ないんですけど。  
君島 いいんじゃない？まあ。  
安藤 ええ。

安藤に、LINEの着信がある。

安藤 あ、今日、飲み会、大丈夫ですよ。早く帰ってこれるみたいですので、主人。

君島 いやでも、酒はまずいんじゃないか、酒は。

安藤 大丈夫ですよ。もともと、私、飲めないし。ウーロン茶で。

君島 そう。なんか、すまないね。

安藤 いえ、大丈夫です。

君島 そうかあ。うん・・・ああ、大工事が始まるなあ、時間割全部組み換

えだもんね。なんだ、もう少し早くわかつたら、よかつただけど。

安藤 すいません。ちよつと、迷ってて。

君島 いや、まあいいんだけど。新一年生の担任だもんね。今から誰か引き

受けてくれるかな。

安藤・・・先生、学年付きですか。

君島 うん。来年度は、担任、外してもらったんだ・・・

安藤 すみません。

君島 僕か・・・そっか・・・僕か・・・新一年生か・・・

安藤 (無言)

君島 1, 2, 3 sheeps will drink.

安藤 あ、羊はsつかないですよ。

君島 だって複数形だよ？

安藤 つかないんですよ。羊は。

君島 じゃ、3 sheep will drink.

安藤 はい、そうです。

君島 そうか。sはつかないか。

安藤 はい、つきません。

君島 そうなんだ、へー。sはつかないのか。

安藤 ええ、つかないんですよ。sは。

安藤、所見を書いている。

君島、そんな安藤を見ているが、やがて窓の外を見る。

やがて幕。